

# 鈴木大拙

飯島 孝良\*

## 1. 基礎文献

鈴木大拙（1870～1966）の和文著作（英文著作の和訳を含む）は、増補新版40巻本『鈴木大拙全集』に網羅されている。大拙が「仏教・禅思想を広く海外に紹介した功績は大きい」（『岩波仏教辞典』第二版, p.591）などと言及されることは多いが、その問題関心が大乘仏教をはじめ多岐にわたることは論を俟たない。禅のみならず、真宗や華嚴についても多く論じて「日本的靈性」という概念を提示した大拙の全体像は、そう易々と把握しきれない。とはいえ、大拙の特色ある思索はやはり『禅思想史研究』（『全集』第1～4巻）などの禅に関する論述に体现されているといえよう。大拙に関してまず読み込むべきは、こうした和文著作群である。

その一方、欧米圏で広く受容され続けてきたのがその英文著作群であることは、決して軽視すべきものではなかろう。『大乘仏教概論*Outlines of Mahayana Buddhism*』（1907）、『禅論集*Essays in Zen Buddhism*』三巻（1927-1934）、『禅と日本文化*Zen and Japanese Culture*』（1940）といったものに関しては、各時代にどのような国・文化圏で読まれてきたかを追いかけるだけでも、いわゆる「Zen」の国際的展開の一端を垣間見ることが出来よう（この点は後述）。更には『大乘起信論』『楞伽經』『教行信証』『碧巖録』の英訳によって、欧米圏における仏教研究は少なからず前進し、或いは大拙の仕事を批判的に乗り越えることで発展したといえるであろう。

大拙の生涯について調べるのであれば、桐田（2005）が非常に有益であり、詳細な年譜や著作一覧（年次順）はかなり行き届いたものといえる。

---

\*花園大学国際禅学研究所専任講師（専任研究所員）

これは現在では松ヶ岡文庫HPでダウンロードできるため、より一層使いやすい資料となっている。また、書簡類は岩波書店版『全集』増補新版第36～39巻に相当数が収録されており、禅文化研究所（1989）掲載分の書簡も同『全集』増補新版第36巻に組み込まれている。なお、これら『全集』に収録されていない貴重な英文書簡や英文日記などについては、『松ヶ岡文庫研究年報』（および松ヶ岡文庫HP）で閲覧可能である。更に、大拙へのロングインタビューとして秋月（2002）なども見逃せぬ文献といえる。

## 2. 現在問題となっていることとその論点

大拙の業績とその方法については、これまでも数多くの論者から検討や述懐が重ねられてきた。久松（1970）、西谷（1975）、上田・岡村（2002）、ないし金子（2006）などによる論集においては、仏教学者・哲学者・文学者・作家・編集者・僧侶といった、大拙に少なからぬ思い入れのある諸氏が各々の考えを語っている。これらは、如何に多くの視点から大拙が語り得るかをよく示すものといえる。大拙の多様性を概観する最新の成果としても、『現代思想』（2020）で総特集が企画され、その関心度のなお高いことが実感される。

そうしたなかでも、石井（2015）は大拙の業績を概観するうえで参考にすべき論攷である。このなかで、大拙の禅学研究の方法について次の三点が指摘される。

- (a) 文献資料の紹介とその批判
- (b) 「禅とは何か」という観点による哲学的・語学的解明
- (c) 禅思想の役割の主体的解釈

更に、大拙がそうした研究を何のために残そうとしたかについては、次の五点を挙げている。

- (あ) 禪の現代的表詮（日本語・英語）
- (い) 東洋思想の禪を世界（特に欧米）へ紹介
- (う) 禪のもつ悟りの自利性の誤解を是正し、自利利他（特に慈悲・衆生無辺誓願度）を強調
- (え) 唐代禪（盤珪禪を含む）の魅力を開拓し、唐代禪と看話禪の相違を解明
- (お) 禪の「不立文字」・「公案」を解明、禪の論理（即非の論理）を提示

これらの整理は、大拙の方法を特徴づけている要素を客観的にまとめたものといえる。こうした論点を確認したうえで、現在とりわけ焦点が当てられている問題点は、次の [A] ～ [C] と考えられる。

#### [A] 禪の「思想」：二項の相補的構造として

大拙の思索については、西田哲学との影響関係から検討するものが相当数みられ、竹村（2004）や井上（2015）などはその例に属する。或いは、所謂京都学派哲学に関連させて語られる大拙は、その参禪経験を踏まえて言及されることが多かった。それに対して、大拙の論じる禪が、唐代禪や宋代禪とどう重なりどう異なるのかを分析する論攷も提出されてきている。小川（2011ならびに2015）はその代表例であり、石井（1991）は大拙が中国禪とともに道元禪をどう捉えようとしたかを検討したのとして見逃せない。最新の成果としても、蓮沼（2020）などの意欲的な大著が提示されており、大拙は数十年前までみられた「賛仰」か「唾棄」かの二者択一ではなく、禪学や思想史学の大きな文脈に位置づけながら詳細に分析しようとされてきている。

大拙が禪の「思想」について論じるとき、その看方が所謂「伝統」からどのように展開したものといえるのか、注意深く追いかける必要がある。大拙は、高校時代に北条時敬（1858～1929）の導きによって参禪し、東京帝大文科大学選科に在籍した際は円覚寺で寺男のように暮らし、そこで指導した釈宗演（1860～1919）の仲介でポール・ケーラス（1852～1919）の

下で働くこととなった。こうした経緯を考えれば、大拙が臨済禅とかなりの接点を有し、後代になっても禅宗において伝統的な考え方をそのまま述べているようにもみられる。ただ、大拙は居士として禅に関わっており、大拙の考えがそのまま禅宗内部の通念を代弁しているとは即断し難い。我々が大拙の所論を検討する際も、それが護教的であるのかどうかを丁寧に見分けるべきであろう。

この点に関連して、大拙の禅学研究は文献学的な手法も取り入れたものであり、敦煌文献への着眼などは時代状況を考えれば先駆的だったといえる。その狙いは、禅の「思想史」を近代知性によって文献に即して描出するところにあった。そして、生成期の禅宗の姿が、敦煌文献の出土とその緻密な分析によって初めて知られるようになったのである。現代の研究水準に照らすと役目を終えたものもあるが、少なくとも大拙その人の立場が必ずしも「宗教経験」第一主義というわけではなく、文献や歴史史料が客観的な論証を裏付けるものであるという視点を有していたことを示しているであろう。

そうした大拙の立場は、1940年代までに「禅思想史」という枠組となっていく。『禅思想史研究第一』（1943）では、これまでにない形での「禅思想史」描出を課題としていた。大拙自身、「禅思想史」という枠組を次のように問うている。

禅思想史と云ふべきものはまだ書かれて居ない。故忽滑谷快天氏の著述も、宇井伯寿氏のも、思想史ではない。【中略】而かも禅思想は東洋における最も偉大なる精神運動の一つで、これからは全世界の精神的文化にも大いに寄与すべき運命をもつて居る。その思想を近代的思惟の方法で闡明すべきは日本の学者の使命の一つである。（『大拙全集』第1巻, p.3）

ここで言及されている忽滑谷快天（1867～1934）も宇井伯寿（1882～1963）も共に曹洞宗の僧籍を有するが、その記述は所謂宗学とは異なるも

のである。それは、近代以降に成立した仏教学の台頭にも呼応しつつ、禪宗の成立過程とそのキポイントを時系列的に記述するものであった。忽滑谷や宇井のみならず、鷲尾順敬（1868～1941、真宗大谷派僧侶）や今枝愛真（1923～2010、曹洞宗僧侶）といった歴史学者が、東京帝国大学史料編纂所で実証的記述による禪宗史研究に着手する。こうして、僧籍を有しつつ宗門と異なる学術的記述を試みる研究者が現れてくるが、それらは思想の詳細な内実まで扱うわけではなかった。そのように歴史的な過程を列挙していく記述方法に対して、大拙は「精神運動」としての「禪思想史」を「近代的思惟の方法」で記述しようと試みるという。こうした問題意識は、大拙が宗門人でも歴史学者でもない居士の立場から禪の思想を捉えようとしたことも関わるであろう。

その独自の立場を象徴するかのような「近代的思惟の方法」とは、中国から日本へ禪がどのように受容され、体系化され、かつまた批判されたのかを描き出そうとする試みであり、大拙が歴史史料を素材にして禪の「思想」を語ろうとする営為であったと言い得る。例えば『禪思想史研究第二』（1951）の序文では、敦煌文献にみえる「東土六祖の所説」たる初期禪と後代の公案禪を対比しながら——そして禪の「伝統」と自身の打ち込んでいる「近代」の禪とを較べつつ——禪の「経験」と「表現」という二項を共に重視して思索していく、という姿勢が表明されている。大拙が提示しようとする「禪思想史」という枠組みは、この「経験」と「表現」——もしくは「伝統」と「近代」——の二項を往還しながら記述されていくところに特徴があるといえる（飯島，2019）。そして、こうした記述方法に着目しながら、大拙の思索を跡付ける必要がある。

## [B] 禪と真宗と華嚴

安藤（2018）は、大拙が当時では最新の学術成果を受容しつつ文献を読み解くことで、禪と浄土と華嚴の総合としての「大乘仏教」を企図していたと指摘している。安藤は更に、大拙が自他の区別以前の根源として各自

に「本具底なもの」が具えられていると考え、これによって他者の苦しみを  
感じ取るようなところから自利利他の精神——そして「衆生無辺誓願度」  
という菩薩の誓い——に接し、「自他という差異を乗り越えていく大乘仏  
教、「東方仏教」の原理となるもの」（安藤, p.211）とみていたともする。  
この「衆生無辺誓願度」について、大拙の「金剛經の禪」（1944）は「大智」  
と「大悲」のふたつとの関係を次のように述べる。

「衆生無辺誓願度」は、分別の上で、他人の苦しみ、自分の苦しみといふや  
うにわけて感ずるのでなくして、存在一般の苦しみ、世界苦或は宇宙苦と  
いふやうなものに対しての大悲の動きである。宇宙苦を見るのは大智であ  
るが、それからの離脱は大悲の能動で可能になる。【中略】併しこれは話の  
順序を云ふので、事実経験の上では、悲即智、智即悲で、同時同処に動く  
のである。（『大拙全集』第5巻, pp.454-455）

大拙のこうした看方は、禪のみならず浄土や華嚴の考え方を分析する際にも  
適用されており、大乘仏教に通底する自利利他の精神を描出しようとする  
狙いがみられる。

これに関連して、藤原（2019）などは、大拙が浄土思想をどう考えていたか  
について検討しており、竹村（2018）などは、華嚴に関する大拙の考  
えへ分析を試みている。大拙思想＝禪と限定しないことで、むしろ大拙が  
禪にどのような特質を見出そうとしたかが一層明確にされるであろう。

## [C] 西欧におけるZEN

大拙が欧米でどう受容されてきたかは少なからず検討されてきたが、ピ  
クトリア（1997）やフォール（2004）のように、大拙の“悪影響”に批判を  
重ねる論者も少なくなかった。これに対して、欧米圏における大拙の位置  
づけをより客観的に整理分析するものも出てきており、最新の部類として  
ジャフィ（2014）が挙げられる。また、大拙の米国における活動を詳細に

検討するものが出されており、吉永（2019）などによってピアトリス夫人与神智学との関係も踏まえて調査が進められている。

なかでもグレイス（2014）は、大拙の和文著作や英文著作、或いは英文日記なども十分に読み解き、その日欧にわたるライフヒストリーの詳細、和文と英文のあいだにある表現と内容の異なり、大拙の論述にある「楕円的思考」という特徴など、瞠目すべき指摘が数多く示されたものとして特筆に値する。これは大拙が国内と国外にどのような影響を与えたかについて、人間関係・表現・思想といった観点から論述したものとも考え得る。

### 3. 今後解決すべき課題

大拙については、研究にしても回想にしても相当数が世に出されているのは確かである。ただ、吉永（2020）は大拙の生涯とその影響関係について「特に歴史資料はかなり整理されているのにもかかわらず、歴史的に信頼できる資料が基本的に整理されきっていない」と指摘し、「そういう伝記的な研究を多くの人が共有して、どんどん疑問点を出し、それをもう一回、思想へとフィードバックしていかなければ、なかなか次の世代にバトタッチできないのではないかと述べている。こうした問題点は、大拙を見直す上で一層意識すべきものとする。そこから、今後の大拙研究において主に次の三点が課題となっていくと思われる。

#### ①個人史の整理

大拙が日欧においてどのような人間関係を形成していたのか、そうした具体的な点の調査が思いの外充分ではない。大拙が円覚寺で触れた禅、ポール・ケーラスの思想から受けた影響や米国滞在時の思索の内実、西田幾多郎（1870～1945）をはじめとした研究者との交流など、これらは書簡類の読み解きや時代背景の分析などを踏まえて展開させるべきであろう。

こうしたことに関連して、大拙を陰に陽に支えていた存在の証言も参照

すべきであろう。例を挙げるならば、志村（1967ほか）のように大拙の傍らで過ごした者の回顧録や、大拙をはやくから支援していた経営者の野村洋三（1870～1965）らの友人との交流を示すもの（白土, 1965）なども、大拙の行実を知るうえではひとつの資料と位置付け得るであろう。そうした地道な作業が、大拙を過度に伝説化させないものにもなり得る筈である。

## ②「思想」の取り扱い

大拙が大乗仏教の根本精神として「自利利他」に着目していたことは既に述べたが、その前提として如何に己の罪惡を自覚し得るかを問うていた面もみられる。即ち、大拙の問いは、我々人間が合理的には解き明かせぬ「人生苦」を抱えて生きていかざるを得ないという認識であるとともに、己の「罪業」を認識して如何に引き受けようかを考え続けるところに「靈覺」（「靈性的自覚」）があり得る、とするものである。この認識は、大拙が仏教の自力性と他力性をどう捉えていたのかを考察するうえで、より一層分析の求められる論点といえる（飯島, 2020b）。

これに関連して、西田哲学とも影響し合いながら大拙が提示し続けた「矛盾的自己同一」という考え方は、1940年代までに大拙が仏教を語るうえで常に根本に据えられていた。但し、戦後にはこれについて批判的に乗り越えようとする立場も現れてきていた。例えば禅学者の市川白弦（1902～1986）は、大拙の『靈性的日本の建設』（1946）を「仏教倫理現実化の問題に関連して、これに比べられる重要な業績を私はほかに知らない」（『市川著作集』第4巻, p.374）と高く評価している。だが、大拙が禅や華嚴を通して探究した「絶対矛盾の自己同一」が本来具現化すべき「もっとも深い意味における民主的な自由連合」へはつながらず、それが戦時中の「聖戦体制」に帰する「状況追従主義」に化してしまったことが、市川の大きな課題となっていた。このように、大拙が構想していた思想を戦後日本に真に資する形となるよう批判的に継承しようとする立場もみられ、その成否について現代的視座から検討する作業が一層求められよう（飯島, 2020aほか）。



### ③欧米圏での大拙：批判と受容に関する現代的視点からの再考

もうひとつ、欧米圏における大拙は、やはり今なお「Zen」の伝道師として強く印象付けられているといえる。前述のように、大拙の“悪影響”が指摘される一方で、大拙の影響が如何に一般化しているかを伝えるものもある。シャインバーグ（2005）には、ニューヨークの「SOHO禅」に関する興味深い体験談がある。シャインバーグが翌朝の摂心に備えて眠ろうとするなか、上の階でレイヴ・パーティが行われているため、たまらずクレームをつけにいくと、相手はこう反論したという――

おい、下で禅をやっているとか聞こえたが、静かにしてくれなんて言いに来るとはどういうことだ？鈴木大拙の本を読んだことがないのか？本物の禅の人たちは静けさを求めたりしないんだぜ。静けさを創るんだ！やつらは砂漠に置かれようが、タイムズスクエアに置かれようが、あの激戦地のノルマンディの海岸に置かれたってよ、なんの変わりもねえんだ。おまえたち、どんな禅をやっているのか知らないが、ちょっとした物音でいらついているようじゃあ、本物じゃあるまい。（山村記, p.310）

こうした大拙のイメージが、如何なるルートで一般化し、欧米社会に定着したのか――興味深いとともに、ここにこそ禅がZenへと展開した一端を見出せるのではないか。これはまた、日本仏教の国際化の諸相を明かすうえでも大きな課題といえるであろう。

#### 【参考文献】

秋月龍珉（1992）『世界の禅者―鈴木大拙の生涯』岩波書店。

安藤礼二（2018）『大拙』講談社。

―――（2020）「総特集・鈴木大拙―生誕150年 禅からZENへ―」『現代思想』第48巻第15号，青土社。

飯島孝良（2019）「鈴木大拙は日本における禅籍受容をどう考えていたのか―『禅思想史研究』を中心に―」『近代仏教』第26号。

- (2020a) 「禪・華嚴と日本主義—市川白弦と紀平正美の比較分析を通じて—」 石井公成 (監修)・近藤俊太郎・名和達宣 (編) 『仏教の近代思想と日本主義』 法蔵館, pp. 347-377.
- (2020b) 「大拙における禅思想史観と「日本」の位置—「業繋苦」と「靈覚」への問いとして」 『国際禅研究』 第6号, pp.196-232.
- 石井修道 (1991) 「道元の靈性批判—鈴木大拙の靈性と関連して」 『道元禪の成立史的研究』 大蔵出版, pp.716-779.
- (2015) 「鈴木禅学が残したものの—その二つの視点を中心に—」 『駒澤大学禅研究所年報』 第27号, pp. 71-92.
- 市川白弦 (1993-1994) 『市川白弦著作集』 全四巻、法蔵館.
- 井上克人 (2015) 『〈時〉と〈鏡〉—超越的覆蔵性の哲学』 関西大学出版部.
- 上田閑照・岡村美穂子 (編) (2002) 『鈴木大拙とは誰か』 岩波書店.
- 小川隆 (2011) 『語録の思想史—中国禅の研究』 岩波書店.
- (2015) 『禅思想史講義』 春秋社.
- 金子務 (編) (2006) 『追想 鈴木大拙—没後四十年記念寄稿集』 松ヶ岡文庫.  
[https://matsugaoka.sakura.ne.jp/ja/member/40th\\_cont.php](https://matsugaoka.sakura.ne.jp/ja/member/40th_cont.php) (2021年3月9日).
- 桐田清秀 (2005) 『鈴木大拙研究基礎資料』 松ヶ岡文庫 <https://matsugaoka.sakura.ne.jp/ja/member/fundamental.php> (2021年3月9日).
- グレイス, ステファン (2014) 「鈴木大拙の研究—現代「日本」仏教の自己認識とその「西洋」に対する表現—」 駒澤大学大学院人文科学研究科博士論文.
- 酒井懋 (訳) (2016) 「鈴木大拙英文書簡〔日本語訳〕」 『松ヶ岡文庫研究年報』 第30号, pp77-110.
- (2017) 「同Ⅱ」 『松ヶ岡文庫研究年報』 第31号, pp105-178.
- (2020) 「同Ⅲ」 『松ヶ岡文庫研究年報』 第34号, pp63-126.
- 志村武 (1967) 『鈴木大拙随聞記』 日本放送出版協会.
- Shainberg, L. (1997) *Ambivalent Zen: One man's adventures on the Dharma path*, Vintage (山村宜子訳 (2010) 『矛盾だらけの禅』 清流出版).
- ジャフイ, リチャード (2014) (小川隆訳) 「いま、大拙を読む—Zen and Japanese Culture二〇一〇年版解説」 『思想』 第1082号, pp.85-110.
- 白土秀次 (1965) 『野村洋三傳』, 神奈川新聞社.
- 鈴木大拙 (1999-2003) 『鈴木大拙全集』 増補新版四十巻, 岩波書店.

- Suzuki, D. T. (2009) "D. T. Suzuki's English Diaries" 『松ヶ岡文庫研究年報』 第19号, pp.37-158. <https://matsugaoka.sakura.ne.jp/ja/member/ed.php> (2021年3月9日) .
- 禅文化研究所 (編) (1989) 『鈴木大拙未公開書簡』 禅文化研究所.
- 竹村牧男 (2004) 『西田幾多郎と鈴木大拙—その魂の交流に聴く』 大東出版社.
- (2018) 「鈴木大拙と華嚴思想」 『中央学術研究所紀要』 第47号, pp. 3-21.
- 西谷啓治 (編) (1975) 『回想 鈴木大拙』 春秋社.
- 蓮沼直應 (2020) 『鈴木大拙—その思想構造』 春秋社.
- Victoria, B. (1997) *Zen at War*, Weatherhill (エイミー・ルイーズ・ツジモト訳 (2015) 『〈新装版〉 禅と戦争—禅仏教の戦争協力』 えにし書房) .
- 久松真一 (編) (1971) 『鈴木大拙—一人と思想』 岩波書店.
- フォーール, バルナール (2004) (金子奈央訳) 「禅オリエンタリズムの興起—鈴木大拙と西田幾多郎— (上)」 『思想』 第960号, pp.135-166.
- 藤原智 (2019) 「曾我量深の「往生と成仏」論について—その影響としての鈴木大拙—」 『親鸞教学』 第110号, pp.17-40.
- 吉永進一 (2019) 「大拙夫妻と神智学—大拙英文日記とピアトリス資料を参照して」 『松ヶ岡文庫研究年報』 第33号, pp.1-24.
- (2020) 「「生 (life)」 と「経験」 からみた宗教史」 <http://www.shinran-bc.higashihonganji.or.jp/report/report12.html> (2021年3月9日) .

